

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8202
京都市左京区田中大堰町49
075-701-3164

洛友会最長寿者、本多静雄氏（元中部支部長・顧問）は去る平成11年5月6日ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

本多静雄氏を偲ぶ

関西電力株式会社

名誉会長 芦原 義重（大13年卒）



本多さんと私が、京都帝大の電気工学科を卒業したのは、大正十三年のことです。一緒に卒業したのは三十九名でした。この年の干支が甲子であったことから、同年電気工学科卒の同窓会の名を、誰言うとなく「甲子会」と呼んできました。ちなみに、甲子園球場が

できたのも大正十三年です。

甲子会はいつも楽しい会でした。そうして会のおつど、いつも「話の輪」の中心におられたのが、本多さんでした。もともと年が少し兄貴分だったこともありすが、何よりその多彩で、ユーモアたっぷりの話に、誰もが強く引きつけられました。話題は、ご専門の電気通信の話から、本も出されている焼き物の話、さらには狂言や文学、絵画、はてはヨーロッパ留学中に出会った女性の話へと広がり、とどまり尽きるところを知りませんでした。

しかし、この会も、お互い寄る年波で、徐々に開かれなくなり、昭和五十九年、ちょうど卒業から六十年目の甲子の年、京都御所を訪ね、嵐山吉兆で開いたのが、とうとう最後になってしまいました。この時に集まったのは、本多さんと私を入れて八名であったように記憶しています。

甲子会の集いこそ、こうして途絶えてしまいました。その後、本多さんからは、あの有名な自宅での観桜会（「陶器と桜を観る会」）や、明治村旧帝国ホテルでの茶会にお招きをいただき、旧交を温めることができました。

また、しばしば電話をしてもらえ、今も、まだ本多さんから電話がかかってくるような気がしてなりません。

本多さんの号は、青佳（せいすい）です。「静雄の扁とつくりか」とつたものだ。意味から言えば「青い鳥だ」と語っておられました。あの豪放磊落なお人柄の内に秘められた少年のような知的好奇心で、まことに終生、青い鳥を追い求められたご生涯だったように思います。

甲子会でただ一人となり、老残の思いがつのりですが、今はただご冥福をお祈りするのみです。

百寿翁本多静雄顧問を偲んで

洛友会中部支部長 大野 彰（昭25年卒）

洛友会の大長老である本多静雄氏が、平成十一年五月六日、午前八時十三分、愛知県豊明市の藤田保健衛生大学病院にて、静かに百一年余りの生涯を遂げられました。

誠に痛恨の極みで、その多彩な業績を偲びつつ、深くご冥福をお祈り申し上げる次第でございます。

氏は一八九八（明治三十一年）、旧愛知県西加茂郡上郷村に生まれられ、一九二四年京大工学部電気工学科を卒業。

戦前は通信局、興亜院（対中国政策のため設置された内閣直属機関）技術部長、技術院第一部長として、通信官僚の第一線で活躍。

戦後は故郷に帰り、一九四七年に電気通信協会名古屋支部長、五年には日本電話施設を創業し、その社長に就任されました。

宮仕えから一転、現在言う所のベンチャービジネスへ転向された訳で、時代を見る目の確かさをうかがい知ることが出来ます。

六九年からは、自ら興されたエフエム愛知社長、七七年には同社会長に就任されるなど、「東海の

ドン」として、中部の通信放送界に大きな影響力と指導力を持ち続ける一方、陶芸をこよなく愛し、陶芸研究にも大きな足跡を残されました。

こうした各界での業績により、七三年には叙勲の榮に浴されて勲二等瑞宝章を、又、七七年には（財）明治村から土川元夫（元名古屋鉄道会長・明治村創立者）賞を、八八年には中部日本新聞社から中日文化賞を受けられました。

「人生最大のドラマ」と語っておられたのは、五四年猿投古窯の発見でありました。

ご自宅（豊田市）近くで出土した陶器の破片をきっかけに、名古屋大学考古学教室の協力を得て約千年前の窯跡千力所を発掘されましたが、釉薬を使った日本初の焼物の窯であることが分かり、陶磁史の空白を埋める大発見でありました。

愛知県陶磁資料館の建設にも参加され、昭和五十年の開館の折に、これまで収集された多数の所蔵品を寄贈しておられます。

陶器に関連して最も世間の耳目を集めたのは、六十年の所謂「永

仁の壺」事件でありましよう。

愛知県猿投村(現豊田市)のご自宅の近くに移り住まれた陶芸家加藤唐九郎氏とは、陶芸の師として、又、親しき友として交際を続けてこられました。「永仁の壺」が実は加藤唐九郎氏の贋作と分かるや、唐九郎氏の名譽を守るため、当時の持主から問題の壺を買取り、秘かに所蔵しておられました。この壺には鎌倉末期の「永仁二年」の銘があり、五九年文部省により国の重要文化財に指定を受けたものの、翌年に贋作疑惑が浮上りました。

国の文化保護委員会が調査に乗り出し、加藤唐九郎氏が自作であると名乗り出て贋作であることが判明。

六一年には指定が取り消され、昭和の陶芸史に残る贋作事件となりました。

本多氏はその後、唐九郎記念館が完成するや、この壺を贋作ではなく、唐九郎作品として寄贈されました。

「唐九郎さんも亡くなり、何時までも『偽物づくり』と言われてはかわいそう」という、人の心の痛みが分かる暖い心の持主でありました。

こうした深い包容力と、友を思うお心に、強い感動を覚えざるを得ません。

又、陶芸のみでなく、囲碁も中々の腕前で、洛友会中部支部の碁会は、氏が行動の根城とされていた電気通信ビルで行われ、私は二目でお手合わせをお願いしておりましたが、今年はやわぬこととなってしまいました。

凡人では中々思いも及ばないことですが、狂言のご造詣も深く、毎年開かれるご自宅での観桜会では、ご自作の狂言を自ら能舞台で演じられ、参集した多くの財界人・文化人をもてなされました。

今年も四月四日に例年通り開催されましたが、昨年暮れに美恵子夫人を亡くされたこともあり、体調が少々すぐれず、車椅子にて暫時お顔を見せられたのが最後となつてしまいました。

一八九八年のお生まれでありました氏は、「三世紀に亘つて生きることには挑戦したい」と日頃漏らしておられました。後二年を残して旅立たれた、誠に残念の極みでございました。

合 掌



日本の製造業の今後に想う

前関西支部長 安井 貞三(昭31年卒)



ここまできたかという気持であった。その後更に自動車部品業界に及んでいる。

1. 日・米・欧の重電機業界

自分の身近な分野で考えてみると、米は市場経済と利益追求のルールで動いており、懐かしい重電機器メーカーとしてのGE(一部を除き)も、ウエスティングハウスもない。消えて行った会社も多い、名前は残っていることも多い。中身が入れ替わっていることも多い。従業員を別の職種の仕事にローテーションすることが難しく、むしろレイ・オフするか、部門毎売買する方が合理的だとの考えなのだろう。

これに対してヨーロッパでは企業の寡占化、巨大化が進んでいる

が、会社の名前と内容は余り変わっていない。従業員をローテーションすることもレイ・オフすることも難しく、吸収合併が多いからだろう。重電機器メーカーはABB(Asea・Brown・Boveri社)、シーメンス、アルストム及びシユネデル(旧マラン・ジェラン)

位に集約され、これが欧・米の市場を殆ど抑え、各所に製造拠点を持って全世界に勢力を伸ばしている。ところが、最近シーメンスとシユネデルの特高部門の合併の失敗や米GEによるアルストムのガスタービン発電分野の買収の噂、ABBとアルストムの発電部門の合併案等、まだまだ流動的で、誰が敵で誰が味方か判らない。

一方日本では「企業の寿命30年」と言われ、30年スパンでの業種の浮き沈みは結構激しいが、今までは事業が成熟化しても従業員のレイ・オフができぬまま、内部で新しい事業の芽を育て、新しく必要な人材と過剰になった人材のミス・マッチは、何とか社内教育しながら消化し発展してきた。しかしここにきて、それでは切り抜けられない環境の変化が起こっている。

2. 米国と日本の製造業の流れ

1960年代に日本が高度成長時代に入り、米国の製造業は衰退の一途をたどった。繊維、鉄鋼、自動車、家電、半導体然りである。1980年頃には30〜40年前に建造された鉄橋が錆びて今にも倒壊しそうだとわれ、ハイウェイは継ぎ接ぎだらけで、ニューヨーク市は破産寸前、街中にゴミが溢れかえり、治安も乱れた。高金利で設備投資が進まず、大失業者が急増した。しかし、レイ

ガン政権の規制緩和と減税、ドル安・低金利政策により、設備投資のメインドも喚起され、MITの有名な報告「Made in America」に刺激されてか、産業も立ち直ってきた。良いと思った政策は何でもやってみる実行力はさすがである。産業競争力委員会（ヤング委員長）が結成されたのも、知的所有権の強化を図り、ベンチャー企業の育成を推進したのもこの頃である。結局は製造業も立ち直ったが、それよりもむしろ情報通信、コンピュータ、ネットワーク等をベースにしたシリコンバレーのベンチャー企業に代表される産業が、劇的に成長し、生き返ったと言える。特に最近では、コンピュータネットワークを利用した、e・ビジネスがものすごい勢いで伸びている。果たして日本はこういう構造変革に対応出来るだろうか。

日本は戦後焼け野原から出発し、唯一の資源は人間だと言われ、原材料を輸入し、加工して、付加価値をつけて輸出する加工貿易を錦の御旗に、素材産業からの転身を図り、輸出を中心に繁栄してきた。それがここに来てバブルの崩壊とともに、大不況に突入した。この不況は金融不安が根底にあるとしても、国内外の環境の変化に全てが追従できていないためである。それは米国の製造業が昔、日

本に追い上げられて脱落したように、東南アジアや韓国、台湾、中国の各企業に、今度は日本が追いつけられようからではなからうか。また高齢化が進み、今迄の情性で暮らせることから新しい需要が減退していることや、若い活力の低下も影響しているであろう。

3. 日本の産業の再生と課題

米国のドンドン底から復権したように、日本もこれから立ち直るためにどうすれば良いのか。その移行に際して問題だと思われることを思いつくままに記してみる。

(1) 内需、消費中心の経済への転換

今迄は加工型産業を中心としてきたのに、輸出は石油や食料を賄うだけにとどめたとして、果たして内需中心の産業で収支のバランスがとることが出来るか。

(2) 高齢化、少子化

これから新しい転換のために、柔軟な発想や取り組みを必要とするのに、若者が少なく、高齢者中心の社会でやっていけるのか。

(3) 個性的教育と語学教育及び職業教育

今迄の悪平等主義を排して、各人が「どういう分野で」「どういう仕事をして」「どういう人生を送りたいのか」をよく認識させ、勉強させるために個性的教育を行う必要がある。またもつと大学でしごく必要がある。これから国際

社会で通用するには、少なくとも英語がネイティブの教師に何年間か習う必要がある。また日進月歩の社会で、再教育をして世の中に送り出すために、コミュニティ・カレッジのような機関が必要になるだろう。

(4) 新しい事業の種は大学で、商品化は企業で

現在TLO（テクノロジー・ライセシング・オフィス）が各所で創設されつつあるが、非常に好ましいことで、事業の種は大学で、商品化は企業で、且つ大学の先生方に大変失礼ながらもつとインセンティブの働くような仕組みで、産学連携を進めていく必要がある。

(5) ベンチャー企業の育成

各所で色々な試みがなされているが、新しい企業家を輩出させるために、メンタリテイの涵養と環境作りが重要であろう。

(6) 製造業もさることながら、もつと新しい産業を

仮に金額の規模が同じでも、パチンコ産業とコンピュータ産業と自動車産業を比べた場合、産業としての裾野の広がりも経済的波及効果も全く異なる。これからは自動車のような波及効果の大きい産業は新しく起こってこないであろう。むしろ高齢者向きの産業や使い勝手の良いもの等を開拓することが消費や内需の拡大に必要であ

ろう。製造業というより、非製造業を含めて日本の産業構造をどうするかにかかってくる。

今後「日本経済再生への戦略」を始めとして、「77万人雇用創出計画」「産業競争力会議」等々色々な議論が進むであろう。戦後焼け野原から新しい事業が産学協力のもとに起こったように、今迄の産業で何とか食いつなぎながらベンチャー企業の台頭しやすい環境作りを注力し、新しいものを育てることにより、新たな雇用を創出し、再び日本が活性化していくことが喫緊の課題である。

安井貞三様には7月号の巻頭言としてご寄稿いただきましたが本多氏の追悼文掲載のため御了承願います。(編集部)



教室だより

退官にあたって

田丸 啓吉 (昭33年卒)



私は本年3月末をもって、京都大学を定年退官いたしました。1979年から20年間、京都大学電気系教室に勤務し、この間教室関係の方はもちろん、洛友会会員の多くの方々のお世話になり、ご指導、ご協力いただきました。あらためて感謝と御礼を申し上げます。

私は最初半導体工学講座を担当し、この20年間組織変更で講座の名称は変わりましたが、教育研究の内容は一貫して大規模集積回路(LSI)の設計技術の分野で仕事をしてきました。20年前は、産業界はすでにLSI時代に入っており、活発に研究開発が行われていました。大学ではまだ設計技術を専門にする研究室はほとんどな

く、LSI以前の時代でした。以来、1980年代を通してこの分野は産業界優位の時代が続き、設備や研究費の面でも大学の研究室は苦しい時期でしたが、全国でも最も初期に開設されたLSI設計の研究室として頑張ってきました。

1990年代になると全国の大いにLSI設計分野の研究室が増えてくるとともに、研究の支援体制も整備されるようになりました。特に1996年に発足した、大学の設計したLSI試作の窓口になる大規模集積システム設計教育研究センターは、大学における設計活動を刺激し、研究は急速に活発になりました。この組織は米国内に遅れること10年余りと言われていますが、在任中にこの組織ができ、私の研究室も設備と能力の点で必要な整備ができ、センターと連携して西日本の中核的なサブセンターに成長してきたことは大変嬉しく思っています。

このように最近仕事が急に増えたので、今の感じではこの20年は短かったと言うのが正直なところですが、しかし古い書類などを整理していますと20年の間には大々にもいろいろな変化があり、やはり長い年月であったことを感じます。着任した当時はまだ2階建ての赤レンガの建物が南側と西側にありましたが、この20年の間に

いずれも建て替えられました。組織上も、工学部から大学院重点化により工学研究科の所属になり、最後は情報学研究科に移りました。特に情報学研究科については、1専攻が移行する大きな変化になりました。京都大学の電気関係分野の発展を考えると、新天地に拠点を設けることはこの時期に在職する者の責務であると考えて移行の決断をしました。個人的には最後の年度の大変化は、なじめないうちに退官になり、少し落ち着かない気分が残りました。しかし近い将来、新キャンパスや次の組織変更などが検討が上がってきたときには、更なる発展につながる計画が実現することを願っています。

この20年間の変化の一つに学生の意識あるいは行動の変化があります。最近の学生は、世上よく言われるように、自分たちのグループの内に閉じこもり、外部や社会に対する関心が薄い、あるいは積極的に関わろうとする意欲が少ない者が増えているのを感じます。この結果として学生参加の行事の減少があります。以前は春に関西の工場見学があり、一時期夏休みに関東地区の工場見学もしていました。しかし参加希望者の減少によりこれらの工場見学は中止になっています。教室の行う学生

の工場見学が無くなったことは、教官には仕事が減って幸いです。世の中には学生時代しか見学できないような所があります。このような所を一度も見ないで卒業するのは損をするような気がします。学生たちも就職の決定前に見学に行きますが、小グループで知り合いの先輩のいるところだけ見学する例が多く、職場になる可能性のあるところを見るという意味で、教室の見学とは違います。このところが学生に良く理解されていないように見えますが、しかし学生自身に参加の意欲がないことは、単に工場見学の問題ではなく、広く勉学にたいする態度にも関係しています。根の深い問題だと思っています。

講義などでも、単位さえ揃えば、自分のテーマに直接関係無い分野は聞かない人が増えています。将来の日本の技術を支える現在の学生の行動には心配の種が多いので、世の中でももう少し議論されるようになればよいがと思っています。私自身、まだしばらく大学教育の世界で勤めることになりましたので、この問題を考えていきたいと思っています。

最後に、改めてこれまでの皆様方のご厚情に感謝し、これからもよろしくご支援くださいますようお願い申し上げます。

退官にあたって

堂下 修司(昭33年卒)



私が昭和29年4月に京都に

来て、京都大学工学部電子工学科に第一期生として入学して以来、博士課程までの学生生活の9年間、さらに、昭和38年から京都大学の教官として今日まで、その間の東京工業大学工学部での5年間を除いて31年間、工学部、工学研究科、および情報学研究科においてお世話になり、情報工学、特に知能情報処理の教育・研究に携わらせて頂き、楽しく学生生活を送ることができました。このことは、偏に先輩諸先生方、同僚、関係各位の絶大なるご支援の賜物であると感じております。先日、総長から直々に名誉教授の証書を頂き、ようやく京都大学を卒業したのだと言う実感が湧いて来ました。

高等学校は大阪堺市の三国ヶ丘高等学校でした。どこを受験するか、京大か阪大か、理系か文系か

決めかねていましたが、願書締め切りの直前に、新聞に、「京都大学工学部に電子工学科新設」という、短い記事を読み、即座に、京大工学部電気に決めました。後で聞くと、この概要要求の書類は、当時助教教授であられた西原宏先生が書かれたものであったとのこと。その後西原先生には、京大のLAN、KUNINSの導入で、指導を受け、大変お世話になりました。

4回生になり、特別研究は、当時助教教授でありました坂井利之先生の誘いで、前田憲一研究室に所属し、直接的には、坂井先生の指導を受け音声関係のグループに属しました。特別研究のテーマは、「超音波遅延線(記憶装置)の研究」でした。当時はまだ計算機はありませんでしたが、計算機にする情報処理の装置にしる、論理回路とともに記憶装置が最大の課題でした。しかし結局これは使いものになりませんでした。また、卒業時の主任は、教授になられたばかりの近藤文治先生でした。

大学院に進学して、先輩の井上誠一さんの後を継いで、他の人とグループを組んで、音声タイプライター1号機の試作実験に取り組みました。これは、5日本語単語音をリアルタイムで認識する機械で、真空管とリレーですべて手作

りで作りました。また、順序回路による半母音の実験も行いました。

修士のテーマは、「音声による機械制御の方式に関する研究」でした。博士コースへ進学してからは、坂井先生が教授になられ、有線通信工学講座を担当されたので、坂井研究室に移り、トランジスタ式の日本語単音節の認識装置、音声タイプ2号機を作成しました。この単音節認識に、シフトレジスタ記憶回路を付加し、単語音声認識装置を作成しました。これは、かなり、新聞等でも大々的に取り上げられ、多くの方々が、見学にこられました。その当時、トランジスタはゲルマニウム製で、温度ドリフトが大きく、見学の度に付きつきりでした。坂井研究室の同僚には、長尾真、西尾英之助氏等が居り、それぞれ、文字認識、言語処理、理論等の幅広い情報処理の研究を幅広くおこなっていました。私の博士論文のタイトルは、「Studies on the Analysis and Recognition of Japanese Speech Sounds」で昭和41年にとりました。

昭和38年に助手になり、電気工学実験を担当しました。当時地下に実験室があり、新しいテーマとして、音響実験、フィルター、トランジスタ回路を担当しまし

た。若気の至りと言うか、かなり熱心に取り組み、学生からは「こわい先生」と思われていた様です。

昭和43年に、東京工業大学工学部に移り、新しい環境と、東京という新しい場所で、電子物理工学科の情報工学講座を担当しておられた榎本肇先生との、共同研究室を作り、情報工学の基礎的研究を行いました。音声も結局は、言語であり、次のステップとして、言語情報処理や、基本的な情報処理理論や技法の修得が必要と考え、幅広く基礎的な勉強と研究を行いました。が、榎本先生には本当に、色々なことを教えて頂きました。今から考えても、環境を替えるという事は、新しい考え、ものの見方、新しい友人の開拓等、人の幅が大きく広がった様に思います。ずうっと京大に居るのではなく、若い時に他の大学や企業等の研究を経験し、京大とは異なる新しい環境にチャレンジすることも、非常に有意義であると考えます。

昭和48年に、京都大学の情報工学科に戻り、情報処理講座を担当しましたが、そのベースとなる基本的な概念や考え方は、この東工大時代に獲得したものです。情報工学科で一貫したテーマは、知能情報処理特に情報の知的処理の機構の解明とその処理システムの

構築であり、音声と言語の認識・理解、推論システム、知識処理等を幅広く行い音声理解・対話システムを実現することでありました。詳細は省略しますが、この間の研究を総括しますと次の様になります。

「知能や知識に関する情報処理について、人と機械を統合する立場から基礎と応用を扱う。具体的には、情報構造、パターン認識論、情報意味論、問題解決法、推論方法、概念学習法、知識表現法等を基礎として、知識・推論システム、人間・機械協調システム、言語・概念の理解、音声対話理解等の人工知能的処理とパターン情報処理等について教育と研究を行っている」(平成7年度の知能情報学講座知能情報処理分野の紹介文)

「知能情報処理研究室では、知能情報処理の立場から、人間と機械の協調系をめざして、言語的情報・推論系のパターン認識的・言語処理的・人工知能的手法の統合による深い理解の研究と、そのためのベースとなる理論・処理システム等の研究を行う。具体的には、人間と機械との知的なコミュニケーションとインタラクションのため、また人間にとつても最も自然で、基本的なメディアであるマルチモーダル音声言語対話を中心に扱う。また、これらの研究のベ

ースとなる処理の基本的アプローチに関しては、公理系・規則・述語論理・アルゴリズムなどに基づくデジタル的な処理(記号的推論)と、統計的手法や確率モデル・距離尺度に基づくアナログ的な処理(確率的推論)とを統合した推論機構及びそのための知識表現の研究を行う。」(平成9年の工学部の紹介)

このように分野は多岐に亘っていますが、これらは一体となつて初めて知能情報処理が可能となるもので、意識的に研究の幅を拡げたわけでありませう。平成5、7年度には、それまでの研究を集大成として、全国の音声情報処理分野の研究者を組織した、文部省科学

研究費補助金重点領域研究「音声・言語・概念の統合的処理による対話の理解と生成に関する研究」を主宰しました。不特定話者の連続音声認識システムの実現は、若かりし頃、音声タイプから研究を始めた私にとつて、畢生のテーマであります。

要するに、情報科学の最先端の課題を深く研究し、それらを一体的に取り込まなければ、極めて複雑で、高度の知的システムである音声言語による対話・相互理解システムの実現は出来ないでしょう。本当に音声言語がヒューマンマシン相互理解のツールとして有用になるためには、もう一段のブレイクスルーが必要であると考

平成11年度電気系教室懇話会のご案内

電気系教室学科長・専攻長
荒木光彦、島崎真昭、松重和美、佐藤 亨

電気系教室の懇話会は、卒業生、在校生ならびに教職員を結ぶ場として毎年秋に開催されておりますが、本年も下記のような講演会、懇親会の二部立ての企画で開催致します。会員の皆様には是非御参加の上、互いに親睦を深めて頂きたくご案内申し上げます。

記

- 開催日 平成11年10月1日(金)
- 第1部 講演会 (15:00~17:20)
- (15:00~15:10) 挨拶 電気系教室
 - (15:10~16:00) 「南北学術協力への試み」
名誉教授 加藤 進 氏 (昭和27年卒)
 - (16:00~16:40) 「最近の電池産業の動向」
日本電池(株)取締役社長 田中 千秋 氏 (昭和33年卒)
 - (16:40~17:20) 「最近の企業経営動向について
-シリコンバレーのある電子機器企業の事例-」
日本ヒューレット・パッカー(株)
取締役事業部長 成松 洋 氏 (昭和46年卒)
- 第2部 懇親会 (18:00~19:30)
於: 吉田(旧教養部) 生協食堂 参加費: 無料

えられる。この問題は、単に音声処理の問題であるのみならず、情報科学、情報技術全般の課題でもある。果たして、このままの姿勢で、又は現在のままの情報処理の基本的手法で、次世代の知能情報処理システムが実現できるであろうか。デカルトを始祖とする近代科学において、情報科学は最先端の学問であるが、それだけに過去の大きな学問の流れを把握し、位置付けを明確にして、次のステップに挑戦することが必要であろう。

音声認識音声メディアの研究は、最近ようやくいくつかの音声認識システムが試験的に製品化されて売り出されるところまで来ました。

我々も、先端的なシステムを開発しましたが、しかし、まだまだ解決すべき課題は多い。人間の知能は奥深く、とてもまだ機械が人のように自由自在に話し言葉を認識し、理解するところまでには行っていません。しかし、将来コンピュータが誰でも、いつでも、どこでも、か「friendly」に意図や意志の交流をしつつ使える様になるには、音声言語インターフェースはより一層必要とされるでしょう。

会員寄稿

北海道の山菜採り

芝山 龍一(昭28年新卒)

北海道では、雪融けがすすんでくると、山菜採りの季節が到来する。愛好者も少なからずいるよう

だ。趣味は何かと書く場合に「山菜採り」と付け加える人もいる程である。5月から7月が、このシーズンであり、本年5月に入つて間もない11日の新聞記事の一隅に「山菜採り74歳が死亡」の見出し

で、その中には「9日 朝早く親類の人と2人で入山したが、約束の時間になつても戻つてこなかったため警察署に届け出て捜していたところ、翌朝発見したが既に死亡していた。」との説明であった。

次いで翌日の新聞の第一面の冒頭に「クマに襲われ3人が死傷」と大文字の見出しが付いていた。死亡した男性(47)は、8日から釣りに山へ入り行方不明になつていたもので、3日後に遺体で発見され、署員らと捜索に当たっていたハンターが、近くにいたヒグマ1頭を射殺した。遺体は頭部や腹部にクマに咬まれた激しい傷があつた。

これとは別に、死亡していた男性の現場に近いところで、2人の女性(Aさん50歳とBさん39歳)

が車で山菜採りに出かけた早朝、車から降りて直ぐの所の笹藪から出て来たクマに、Aさんが突然後から襲われ、背中と首に激痛が走る重傷を負った。Aさんを助けようとしたBさんにも襲いか、つてきた。先にクマに襲われたAさんが車に戻り、クラクションを鳴らすと、クマは逃げ去つた。

これまでの10年間におきたクマによる死亡は、今回のことを含めて2人、負傷者は毎年1〜2名がある。因みに北海道のクマの生息数は二千頭と推定されている。

以上のような出来事は、北海道特有のことであり、新聞の全国版に報じられることは少いと思うが、どうであろうか。

今から40数年も前の大津の新聞に、札幌の近郊にクマが出たと報じられたことがあつた。(現在に至つても札幌の定山溪付近の山にクマがいて姿を現わすこともある)

私の母は新聞を殆ど読まなかつたが、付合の多い方であり、とくに社会面の身近な話題は、耳から入れて理解していたようである。私が北海道電力に就職を決めようとしたとき、母は「札幌にはクマが出るというのやから危ない。またソ連の軍用機が飛んできているのやから心配や」と珍しく理屈をつけて説得したことは忘れられない。しかし効かなかつた私は、親

に心配をかけた一つであつた。

こうして北海道に住んで20年位経つた頃の体験を思い出してみた。会社のリクリエーションは、課単位の10数人のグループ 一泊旅行が当時の慣例であつて或る年、ニセコの山のタケノコ(ネマガリダケの芽、本州のタケと異なり、直径2〜3㎝の細いタケ)採りが計画された。山に入りはじめたのは午後、樹木は少なく笹が蜜生しているところであつた。山

菜採りの経験者のリーダーから一通りの注意があつたが実際に採りはじめると夢中になつてしまふ。自分が進んでいる方向はどうかと頭に入れていたつもりが、右往左往してゆくうちに迷子になつてしまったようだ。しかも背丈を越す、弾力性のあるタケが顔を打ち、眼鏡を跳ばされてしまった。探したが見付からない。時間が経つてくると、遂に迷子になつたと諦め、若しこのまゝ、夜になれば少しでも安全な所で過さないと、クマが出てきたら逃げようがないと思ひ、登り易そうな樹を見付けて登り、できる限り視界を広げようと小枝を払つた。

一方、私以外の連中が宿に戻り夕食の卓に着いたとき、「アレ! 芝山が居ない」と分り、さあ大変だと捜索に出た。「オーイ」の遠吠えの音が微かに聞えてきた。次第に暗くなりつゝ、ある中で、白い

手拭を力一杯振りつゞける私を遠に見付けてくれたのだつた。もう少し時間が経てば暗くて分らなくなる寸前であつたと思ひ、ぞつとした。

宿に戻つての夕食の懇親の話題は、遭難しかつた私に集り、すっかり迷惑をかけたことで小さくなつていた。食後には定例の麻雀が始められたが、眼鏡を失つた私に交代できる人が居らず、相手の牌がよく見えないまゝ、「ヘマ」をやりながら楽しんだ。楽しんでもらつたというのが本当か。

知人の一人にKさんがいる。九州から転勤してきて20年近く経つて札幌で定年退職、大方の人が九州へ戻ると思つていたようだ。

しかし住み慣れた北海道に引続き住むことにした。多くの趣味をもち、中でも山登りは学生時代からのベテラン、ときには山菜採りを楽しんでゐる。「山登りや山菜採りは、とくに準備を念入りにし、忘れずに実行すること。何よりも自然を大事にしていく。」が持論だ。

Kさんは直接クマに出会つたことは無いが、クマが通つた痕跡を屢々見かけると言う。

近日中に故郷の大津へ暮参りに行くが「北海道に住んで47年、これまで山菜採りで山の中で迷子になつたことが、その昔に一回だけあつた。しかし野性のクマに出会

うこともなく、心配されるようなことは無い。むしろ北海道は自然の宝庫として貴重です。」と言って手を合わせた。

宇宙と電気

小辻 昭宏 (昭55年卒)

最近、私の身近に衛星を利用した電話がやってきました。この電話はいわゆる携帯電話であり、低軌道周回衛星を66機使用した衛星移動体通信です。地上のアンテナを利用するこれまでの携帯電話では通話ができなくなるような山間地でも通話が可能となります。私の子供の頃は電話を引いていない家も珍しくなかった時代でしたが、今では携帯電話が当たり前のようになっています。そして、よいよ、宇宙を利用した電話が一般の生活にも入ってきました。もちろん、電話だけでなく、自動車に搭載する「カーナビ」などは宇宙を利用するものとしてすっかりお馴染みになっています。

宇宙利用といえば、最近科学雑誌で読んだのですが、衛星を利用して古代エジプトの地下墳墓が発掘されたそうです。この発掘調査は、人口衛星画像データの解析による候補地点決定というまったく新しい手法を考古学に持ち込んで行われました。衛星画像には、遺跡の発見された地点に、未完成も

しくは崩壊したピラミッドの中央に共通してみられた堅穴遺構に似た円形のくぼみのようなパターンと、石灰岩が分布する地域によくみられる明るい反射が確認されたそうです。また、地形図から作成したDEM (Digital Elevation Model) データを立体画像化し、さらにコンピュータによるシミュレーションでナイル川の水位を40メートル上げてみると、現在発見されているピラミッドは、石材の運搬が容易であり、ナイル川の氾濫の影響を受けない丘陵地に建造されていることがわかりました。

このような衛星画像データの解析により、ピラミッドの立地条件を推定しながら発掘の候補地点が決められたわけです。この遺跡はエジプトのカイロの南約30キロにあるダハシユールという町で発見されました。もちろん衛星画像データだけで候補地点を一点に絞ったわけではなく、これまでに発見された遺構の分布を比較検討し、複数の候補地点を選定し、現地踏査で最終的に候補地点が決定されました。地上での調査では、電磁波を地中に発信し地下の物体や空洞からの反射を受信、その状態をモニターでみることでできる電磁波地中レーダーを使い、ついにトウム・チャペル (大型神殿付貴族墓) の遺構が発見されたのです。宇宙から古代遺跡をさがすという

まったく新しいアプローチが大成功をおさめたわけですが、このように従来のやり方にとらわれず新しい技術を大胆に取り入れて大きな変革を生み出すことが、さまざまな分野においてますます重要となってきていると思われまます。

さて、宇宙ということばを聞くと、その神秘さ、不可思議さから大変興味をそそられます。とは言っても宇宙に関して全く素人です。知識もありませんが宇宙のはじまりや宇宙の未来、さまざまなものに挑戦している書物を読むとわくわくしてくるものです。今日、宇宙が膨張していることを発見したエドウィン・ハッブルにちなんで名付けられたハッブル宇宙望遠鏡での研究などによって、宇宙は約150億光年の広がりをもつていて、無数の銀河が存在していることがわかってきました。ところが、その反面、我々の住む銀河といえない形はまだまだ明らかにはされていないそうです。夜空に輝く天の川は我々の銀河を横から見ているものですが、銀河を上からみたらどのような形なのかはこれからの研究で明らかになっていきそうです。太陽についてもさまざまな観測や研究が行われていますが、西暦二〇〇〇年から二〇〇一年頃に太陽の活動が極大期を迎えるそうです。太陽の活動が活発になると磁気嵐を引き起し、電力

系統にも被害を与えることがあります。このようなときは、オーロラが比較的緯度の地域でもみられるようです。約11年周期で極大期と極小期を繰り返しています。確か10年ほど前に磁気嵐が原因と思われる系統事故が北米で起こったように記憶しています。

ところで、この太陽のエネルギーを利用して宇宙太陽発電が研究されています。現在、すでに実用化されている太陽光発電は、光エネルギーを直接電気エネルギーにかえる発電方法ですが、地上で得られる太陽エネルギーは一平方メートルあたり約一キロワットと低く、天候にも大きく左右されます。もちろん、夜間にも発電できません。宇宙太陽発電は静止軌道上の衛星で太陽電池を使って発電するので、昼夜の別もなく天候にも左右されません。このため宇宙では地上の約10倍の太陽エネルギーを利用することができそうです。

宇宙で発電された電力はマイクロ波に変えて地球に送られてくるわけですが、従来の技術を使ったのではこの太陽発電衛星の建設には莫大な費用がかかってしまうそうです。この太陽発電衛星のマイクログ波送信装置の小型化に、実は、最初に話題にしました携帯電話の小型化と低コスト化の技術の応用が期待されているそうです。技術というものは、思わぬところで応

用され大きな成果をおさめたりするものです。

さて、最近、見聞きしたことを取り留めもなくお話ししましたが、宇宙利用のほんの一、二をとってもさまざまな技術革新、技術応用がみられます。20世紀も残すところわずかとなりましたが、今世紀は爆発的に技術が進歩した世紀ともいわれています。人類が初めて空を飛んだのは今世紀に入ってからですが、そのたった66年後に人類は月に降り立ちました。また、真空管一万八千個を使用した重さ30トンの世界初のコンピュータが、今や数センチ角のチップひとつで実現できます。電気工学を学んだものとして、今世紀の技術進歩に電気工学が大いに貢献したことを誇りに思うとともに、21世紀にどのような発展があるか大いに楽しみなどころです。

「私の健康法 (石川様) を読んで

岡 皓一 (昭34年卒)

洛友会々報第186号の「私の健康法 (続)」を読んで、石川様の御親切に対して深く敬意と謝意を表すべく、拙き短文を記します。

私も長年「健康診断」なるものを受け、石川様ほど痛烈にはありませんが、何かほじくり出すという傾向の強い「健康診断」に

ており、すでに4月11日、5月9日に開催しました。今後も継続しますので、東京支部以外の方でも上京された時に出席を歓迎します。

○ゴルフ会

伊藤 貞夫 記

平成10年度活動報告

幹事 舟田 正男(昭24年卒)

洛友会東京支部ゴルフ会は、平成10年度に、3回のゴルフ会を開催しました。下表をご覧ください。

当ゴルフ会の登録者数は119名です(日11年1月現在)。毎回約40名弱の諸先輩にご参加いただいておりますが、毎回の平均参加者数は全登録者数の約1/3弱に当たり、同窓会ゴルフとしては高い出席率

回数	84回	85回	86回
年月日	10.07.14.	10.10.30.	11.03.31.
開催場所	小金井CC	湘南CC	相模原CC
参加者数	23名	38名	36名
優勝者	一戸 光一(42)	間瀬 光朗(29)	舟田 正男(24)
準優勝	石黒 公(40)	松岡 行雄(19)	園山 裕(22)
3位	小西 達夫(33)	石黒 公(40)	神 尚通(23)

(連絡先: 舟田 045 891 1711)

になっていきます。

第84回には田中信高先輩(昭8年卒)がお元気な姿をみせてくださったのをはじめ、第85回には市村宗明先輩(昭9年卒)、第86回には林 潔先輩(昭10年卒)がご参加くださり、往年のシングルプレーヤー振りをご披露くださいました。筑木二郎先輩(昭14年卒)は毎回、西本清一先輩(昭14年卒)もほぼ毎回ご参加いただくといい具合で、老年パワーの妻さに圧倒されました。また、第86回には昭22年から昭24年卒の諸先輩が上位入を独占(別表参照)されるなど、時に「中年パワー」が「若い味いた」りました。若手では、一戸光一氏(昭42年卒)が第84回にブッチギリの優勝を飾られ、中島克人氏(昭52年卒)が第85回に参加くださるなど、若年パワーの存在を印象づけていただきました。このように、老年パワーの底力が光っているのが、当ゴルフ会の特徴ですが、今年から5ヶ年計画で若手の参加を増強し、団塊の世代に旋風を巻き起こしていただくようお願いしています。

毎回、出場者に若干の余裕があります。当ゴルフ会に登録されていない方も、場所(コース)・日程が許される時には、幹事宛お申し出ください。特に、若年パワーの奮起をお願いいたします。

舟田 正男 記

○麻雀会

幹事 中田 良知(昭38年卒)

本会は、他の趣味の会と同様に会員の親睦を目的としているので、カケの風速はゼロでやっています。その代わり、順位賞に加えて大波賞・小波賞・原点賞・敢闘賞・役満賞など、各種の賞を用意しています。上位入賞ができません、他の賞をねらってゲームを楽しめるようにというわけです。さらに、勝負に熱中するだけではなく、最終局の前に夕食をとりながら、会員の動向や近況報告・趣味の紹介などの会話を楽しんでいきます。

交通の便を考慮して、JR中野駅近くのNTT中野クラブが定例会場です。近頃世の中では麻雀人口が減少しているようですが、本会は幸い熱心な会員に恵まれ、内装改造工事中のベニヤ板張りの部屋でプレーしたこともあります。昭和10年代卒業の先輩から若い方まで幅広い会員に参加いただいています。興味のある方は、ぜひ、幹事まで一報ください。

中田 良知 記

(2) グループ活動

会員の方々が卒業の年代に応じてグループを構成し、独自に講演会や、見学会、親睦会など自由な活動を行っています。洛友会では東京支部だけがグループ活動を実行しており、数十年にわたって続

いているものです。現在7つのグループが活発に活動しています。

- ・洛京会 (昭8〜昭11卒)
- ・洛楽会 (昭12〜昭16卒)
- ・東友会 (昭17〜昭20卒)
- ・おぼる会 (昭21〜昭24卒)
- ・五九洛会 (昭25〜昭29卒)
- ・みとおし会 (昭30〜昭34卒)
- ・京極会 (昭35〜昭39卒)

また今年度は、昭40年〜昭44卒の方々が集まって新しいグループを結成される予定で、今後の活動が期待されます。なお、グループ活動の詳細は紙面の都合により次号より順次掲載予定です。

濱野 宏(昭55年卒) 記

東京支部ホームページアドレス (<http://www.2gol.com/users/h/rakuyukai/>)

◎お断り「戦中派の学生生活区」は今回お休みいたしました。

本部だより

本部総会報告

平成11年度本部総会は6月19日、東京目黒「八芳園」で、東京支部総会に引続いて開催されました。

冒頭の会長挨拶では、大学の構造改革により、洛友会の運営も変革期と位置付け、教室との密接な

関係を維持するために幹事会を中心に英知を集めて運営にあたりと表明、また、昨秋の百周年記念事業にたいする会員のご好意に謝意がのべられた。

続いて平成10年度の事業報告、決算報告(表1参照)並びに平成年度の事業計画、予算案(表2参照)について事務局より説明の後、全会一致で承認された。

続いて役員改選に移り本部原案どおり承認された。(別項記事参照下さい)

木村幹事からは、百周年記念事業に関連して、科学技術の発展に向けた奨学活動を支援する旨の紹介があり、最後に上田教授からは教室の現況報告として、教官の異動、進学就職状況、キャンパスの移転構想などのお話があり、大学院重点の工学研究科についてスライドによる説明が行われた。午後6時まえ閉会となり、別室にて懇親会が開催されました。

なお、懇親会の模様は東京支部総会報告の項に掲載してあります。(事務局 記)

本部役員改選通知

6月19日、本部総会にて左記のとおり改選されました。(任期は規約により2年間)

会長 昭18 近藤 文治(留)

表-2 平成11年度収支予算

(平成11年4月1日~平成12年3月31日)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成10年度決算額, 備考. Rows include 会費, 預金利子, 広告掲載料, etc.

表-1 平成10年度収支決算報告書

(平成10年4月1日~平成11年3月31日)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 決算額, 備考. Rows include 会費, 預金利子, 広告掲載料, etc.

2. 支出の部 (単位 円)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 平成10年度決算額, 備考. Rows include 名簿編集費, 印刷費, 送料費, etc.

2. 支出の部 (単位 円)

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 決算額, 備考. Rows include 名簿編集費, 印刷費, 送料費, etc.

平成11年4月27日、応用科学研究所において、領収書、帳簿等関係書類を慎重に監査し、支出及び決算が適正であると認めました。

常任幹事 上田 皖亮

- 幹事: 昭33 田丸啓吉(退教室), 昭34 上田 亮(新教室), 昭30 木村 磐根(留), etc.

(事務局 記)

北海道支部総会

4月27日に例年どおり札幌の「きょうさいサロン」で開催された。今回は西村、池内、芝山、谷村、中山、土橋、福井、木元、の計8名。この中で新人は福井武氏、先輩の西野勲氏の後任で大歓迎、

残念ながら欠席の石川元也氏は、北海道電力の新人社員、長く支部の会員となる人材、喜ばしい限りである。何しろ少数の支部だから4月の北海道は、漸く春の萌が現われ始める時節で、いつも元氣な先輩の西村正巳氏が「連翹の濃くなり庭木ら競りたつ」と詠まれた。この連翹(れんぎょう)は、黄色の花を枝一杯に咲かせて、庭木の中でも華やかさを見せてくれる。

九州支部総会

このような季節での支部総会の集いは気持の和むもの、また長い冬に休みとなっていたゴルフを始められる時期でもあり、話題も多く楽しいひとときを過ごすことができた。役員は、支部長に池内義則氏、幹事は芝山龍一、木元伸一の両名が選任された。 芝山 龍一(昭28年新卒) 記

平成11年度洛友会九州支部総会が各支部のトップを切って、平成11年5月7日(金)、福岡市博多駅前のホテルステーションプラザにおいて、開催されました。当日は、本部から近藤文治会長をお迎えし、会員23名が参加しました。

総会は、立食形式で始まり、久しぶりに会う会員のみなさまが近藤先生を囲んで、気さくな雰囲気の中で、歓談されました。また、初参加の方も数名いらつしゃって会員同志の自己紹介などもなごやかに行われました。 会場を移し、会食形式の場では、近藤先生からご挨拶を頂き、その中で、洛友会の現状や電気教室百周年記念事業の活動状況などを伝えてくださいました。特に会長就任後のお忙しい中であって洛友会改革の構想をお持ちになられてい

て、お年を感じさせない執弁をふるっていただきました。 また、恒例となりました出席者最長老、安田振之助(昭12年卒)先輩の「一言苦言」も飛び出し、ご健在ぶりが印象的でした。(今年のテーマは「精神学習」でした) その後、多数の方からご挨拶を頂き、盛況のうちに総会は終了し、昼食会や来年度の支部総会での再会を誓い散会となりました。 かなり気の早い話ですが、また来年も、老いも若きも多数の方々が参加し、盛大な会になることを楽しみにしています。

市川 憲一(平5年卒) 記

中国支部総会

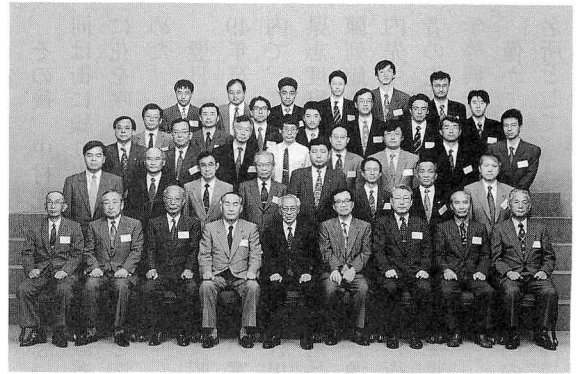
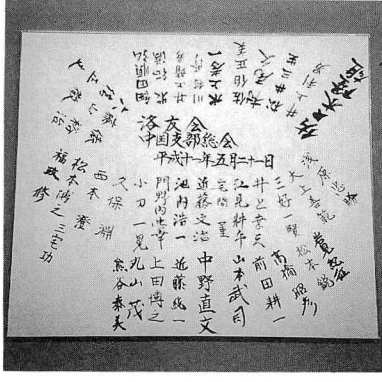
平成11年5月21日(金) 広島全日空ホテルにおいて第46回目とな



る平成11年度洛友会中国支部総会が開催されました。総会には本部から近藤先生、教室から宅間先生をお迎えし、中国地方各地から37名の会員の参加を得て盛大に開催されました。

総会は司会の浅原幹事の開会宣言で開会されました。当日は松谷支部長が欠席されたことから江見評議員に支部長代行挨拶をしていただき、引き続き支部事務局から支部会員異動状況、支部活動状況を報告、会計決算、予算案、支部役員改選案について説明を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。支部役員改選で承認いただいた池内新支部長より、新支部長としての抱負を表わした挨拶をしていただき、新役員体制による中国支部の船出となりました。

続いて近藤先生より洛友会本部の近況について、宅間先生より大学の近況について、それぞれお話しいただき、当初の議事を全て順



調に終了し、浅原幹事の閉会宣言で支部総会を終了しました。

写場での記念撮影の後、全日空ホテル最上階の懇親会会場へと場所を移し支部恒例の懇親会の始まりとなりました。ホテル最上階から広島島の夜景を眺めながら、支部会員の思い出話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で会が進行し大いに懇親を深めた後、最後には近藤先生の挨拶と乾杯の音頭で支部懇親会の閉会となりました。

関西支部総会

関西支部総会の平成11年度総会を5月22日(土)に、ホテル京阪京都において開催しました。昭和11年卒の大先輩から、平成

7年卒の卒業者まで幅広く53名の参加を頂きました。

総会は、安井支部長の挨拶に始まり、引き続き、
・平成10年度事業報告及び決算報告
・平成11年度事業計画及び予算編成案

・平成11年度支部役員改選
について審議を頂き、いずれも満場一致にて原案を承認いただきました。平成11年度の関西支部役員には、

- 支部長 宮本 一 (昭31年卒)
- 副支部長 田中千秋 (昭33年卒)
- 総務幹事 田中宏毅 (昭43年卒)
- 会計幹事 乾 俊一 (昭54年卒)

の各氏が選任され、その後新役員を代表して宮本新支部長よりご挨拶がありました。

なお、関西支部恒例の秋の家族見学会は9月5日(日)に、ちょうど開催中の南紀熊野体験博を中心白浜方面を訪れることとなりました。

最後に教室の橘先生、本部の上田常任幹事より教室の現況についてご報告を頂き、支部総会は閉会いたしました。

恒例の総会後の懇親会は、近藤会長のご挨拶、安井前支部長のご発声による乾杯に始まり、先生方との歓談や久しぶりに顔を合わせた先輩・友人と酒を酌み交わしながらの談笑など、楽しいひととき

を過ごし、途中、宮本新支部長からもユーモアを交えた楽しいお話を頂き、予定していた時間は瞬間に過ぎました。

最後は恒例の「洛友会の唄」の斉唱、大嶋副会長の閉会のご挨拶で締めくくり、来年の再会を誓うての散会となりました。

三宅 浩二(平1年卒) 記

関西支部ゴルフ競技会報告

第71回関西支部ゴルフ競技会が平成11年5月30日(日)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は、5月のさわやかな青空のもと、昭和16年卒の西村正太郎氏、加藤孝一氏が筆頭に、合計39名(シニアの部6名)が競技に汗を流しました。

結果は次の通りです。

- (一般の部)
- 優勝 三崎 博夫 (昭40年卒)
- 2位 内田 頼利 (昭37年卒)
- 3位 坂上 宏 (昭28年卒)
- (シニアの部)
- 優勝 木村 磐根 (昭30年卒)
- 2位 柴田 宏 (昭26年卒)
- 3位 奥村 徹 (昭25年卒)

(二)案内

第72回 平成11年10月3日(日)
於 武庫ノ台ゴルフコース
多数のご参加をお待ちしております。
(連絡先)

関西電力

八木 誠 (昭47年卒)

茶端 淳 (平5年卒)

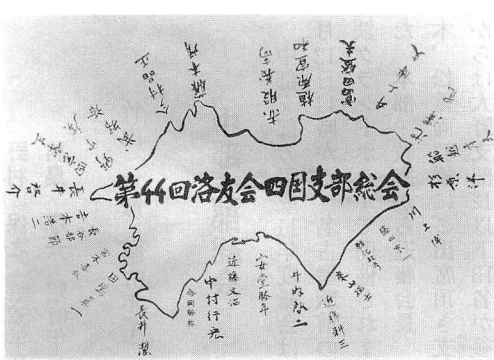
(TEL) 06・7501・0357

下田 一彦 (平4年卒) 記

四国支部総会

5月28日(金)、高松市内の料亭「新常盤」において第44回洛友会四国支部総会が開催された。本部から近藤名誉教授(洛友会会長)、教室から中村教授のご出席を頂き四国内からは26名の会員が集まった。

総会は近藤支部長(昭28年卒)の挨拶で始まり、社会が混沌として大きな変動にある中、日本や大学を変えてゆくには新しい基本となる哲学をしっかりと持つべきであり、本総会も若い卒業生が先輩方のご意見を伺う絶好の機会として





第44回洛友会四国支部総会 平成11年5月28日 於 新常盤

活用し、盛上げてもらいたい旨の話があった。

次に近藤会長よりご挨拶を頂き、昨年9月の百周年記念式典は盛大に行われ、この非常に大きな節目に生まれ合わせることのできた幸福感を感じられるものであったことや百周年記念事業の今後の構想についてのご紹介を頂いた。

また、四国支部の本年満百才とされる渡部兼雄氏のお祝いに触れられ、是非まもなく迎える21世紀までご健在で、三世紀を生き抜いて頂きたい等のお話をされた。

また、中村先生からは、時代の変化に合わせ大学院の重点化が進み、昨年4月には電気教室に関連した情報学研究科が設立されたお話を、キャンパスが狭くなったことに伴い新しいキャンパスの建設

計画が進んでおり都市型分散方式等のアイデアがあることなど教室の近年の動向についてご紹介を頂いた。

続いて、会務報告では元支部長の阿部要氏（昭8年卒）が亡くなられたこと、今村晶正氏（昭23年卒）がこの春の叙勲で勲三等瑞宝章を受賞されたこと、また、前年度会計報告、今年度予算案承認等がなされた。

引き続き懇親会に移り、船越孝夫氏（昭22年卒）の乾杯音頭に始まり、先生方や久しぶりの友人と酒を酌み交わしながらの歓談や、先輩方のご経験談を伺うなど、楽しいひとときを過ごした。

最後に、全員が肩を組み、恒例となった「逍遙歌」と「琵琶湖周航の歌」の合唱で懇親会を締めくくった。

その後、中村先生を始め有志一同は街に繰り出し、電気工学談義に花を咲かせ、深夜まで親交を深めた。

翌日、近藤先生は赤股幹事（昭49年卒）と杉原（昭63年卒）の案内で、高松平家物語歴史館、香川県志度町出身の平賀源内先生遺品陳列館を観光された。特に平賀源内先生遺品陳列館では、電気技術者の先輩としてその業績、人生哲学等興味深くご覧頂けた。

僅かではあったが新たな四国の名所として、ご記憶いただければ、

四国支部としても幸いである。

杉原 洋（昭63年卒）記

北陸支部総会

平成11年6月5日（土）福井市「ホテル・ニュー・ユアーズ」において、平成11年度北陸支部総会を開催いたしました。本部からは近藤文治会長をお迎えし、合計19名が出席しました。

総会は、西村支部長の挨拶で始まり、支部近況報告、会計報告と続いた後、支部役員改選案について審議され、満場一致の承認を得て、新役員が選出されました。新役員を代表して中島新支部長から挨拶をいただき、審議事項を終了しました。

続いて、近藤会長からご挨拶いただき、電気教室創設百周年記念行事の開催状況・寄付金等経理状況、洛友会会費納入状況等についてお話を伺いました。



洛友会北陸支部総会 平成11年6月6日 於 ホテルニューユアーズ

野村 保之（昭52年卒）
村島 孝一（昭61年卒）

竹内 克彦（昭57年卒）記

中部支部総会

中部支部の平成11年度総会は6月12日11時から、名古屋駅前の名鉄グランドホテルで開催されました。本部・教室から近藤会長、荒木、松重両教授にご出席頂き支部からは大野支部長以下13名が参加しました。

この総会に30年以上に亘って当支部の支部長・顧問をつとめられ、総会にも必ず出席されていた本多静雄氏のお顔が見えませぬ。本多氏はこの5月6日ご逝去されました。享年百一歳、ご遺言により葬儀は行われず、昨日6月11日にお別れ会が、本多氏ゆかりの通信ビルで執り行われました。

総会に先立ち、全員黙祷。本多さんを偲び、そのご冥福をお祈りしました。

大野支部長の挨拶と議事に入る前に近藤会長からも、本多さんを偲ぶお言葉を頂きました。

「本多さん、本当に大先輩を亡くしたとの思いで一杯です。1898年19世紀のお生まれですから後2年で「3世紀を生きる」快挙を実現されることを確信しておりましたのに、忽然としてお亡くな

翌日、近藤会長は越前一乗谷朝倉氏遺蹟、越前大仏、越前竹人形の里等をご覧になった後無事お帰りになりました。

改選された支部役員

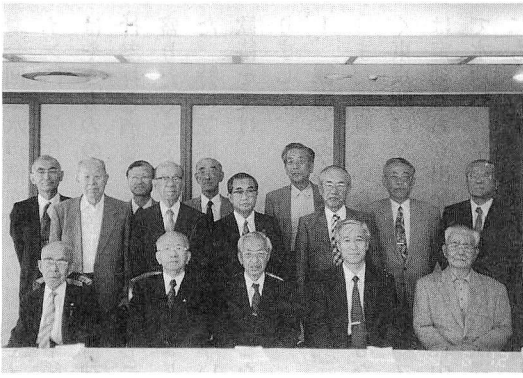
支部長 中島 恭一（昭40年卒）

副支部長 宮越 政通（昭41年卒）

幹事 松木 純也（昭44年卒）

久和 進（昭47年卒）

堀 祐一（昭51年卒）



りになった。やはり人間百歳というのき一つの限界でしょうか。昨年9月、創立百周年に乾杯の音頭をお願いしたところ、快諾され、杖もつかず長いスピーチの上乾杯、まさに式典の圧巻でした。ご冥福をお祈りするばかりです。」

続いて議事に入りました。まず支部役員については、伊藤副支部長、坂入副総務幹事から辞任の申し出がありました承、その他の役員については全員留任ということで可決されました。次に平成10年度事業及び会計報告並びに平成11年度事業計画と予算案が一括してはかれ、満場一致可決されました。

総会に次いで近藤会長から、百周年記念行事が盛況裏に終わり、募金も目標を上回ったことについて謝辞があり、また洛友会の現況、大谷前会長ほか諸先生方の近況に

ついてお話がありました。

ついで荒木教授からは教室の現況、教授陣について、また工学部の西山移転問題などについてご説明いただきました。

懇親会終了後記念撮影、引き続き懇親会に入りました。昭和8年川端さんのご発声による乾杯に始まり、本多さんの見えないやや寂しい会も、先生方や久しぶりの先輩・友人との歓談に会は次第に盛り上がり、恒例の近況報告で瞬間に予定時間です。来年の再会を約し散会、近藤会長・荒木、松重両教授は大野支部長とともに前原会計幹事（F M愛知社長）の案内で本多さんのお別れ会場に向かわれました。

なお平成11年度事業計画は次のとおりです。中部支部会員のご参加をお待ちしております。

中部支部事業計画

1. 懇親囲碁大会

日時 7月10日(土) 13時
場所 名古屋通信ビルベルサロン

2. 懇親ゴルフ大会

日時 10月3日(日)
場所 鳴海カントリークラブ

4組予定

3. 家族同歩の例会

日時 11月6日(土)
名鉄メルサ西口8時30分出發
行き先 志摩スペイン村

石川 進(昭26年卒)記

東京支部総会

去る6月19日(土)、八芳園(東京都目黒区)において平成11年度洛友会東京支部総会・本部総会・懇親会がとり行われました。当日はあいにくの雨模様でしたが、73名のご出席で盛大な催しとなり、とくに平成年代の卒業生など若い方の参加が目立ちました。

今回は東京支部総会と本部総会とが合同開催のため、本部から近藤会長(昭18卒)はじめ、上田先生(昭34卒、新副会長)、木村先生(昭30卒、本部幹事)、松本本部幹事(推薦)をご来賓としてお迎えするとともに、関西より大嶋副会長(昭19卒)、神戸本部幹事(昭14講卒)、東京より池上先生(昭22卒、副会長)がご列席になりました。

1. 東京支部評議員会・支部総会

東京支部総会に先立ち別室にて支部評議員会を行ない、三橋支部長(昭32卒)のご挨拶のあと、伊藤総務幹事(昭54卒)より平成10年度行事・決算状況と、平成11年度役員・幹事候補紹介と、行事予定・予算案を説明。とくに平成10年度より新たに開設した東京支部のインターネットホームページが好評との声が寄せられました。

支部総会では三橋支部長のご挨拶に始まり、平成10年度支部活動の無事終了への感謝とともに「地球

環境をよりよい方向へ進める先端技術の中心として、洛友会会員の役割の重要性」を強調、今後の洛友会の発展に期待を寄せられました。続いて伊藤総務幹事より平成10年度の行事・決算報告を行ない、承認を受けました。

この後支部役員・幹事が交代し、平成11年度は廣支部長(昭33卒)、川本副支部長(昭34卒)、濱野総務幹事(昭55卒)、大橋会計幹事(昭56卒)の体制にて支部活動を運営していくこととなりました。

廣新支部長からは新年度のご挨拶において、これまでの活動内容を継続しつつ、若手会員の参加の充実促進とともに、会員の方のご支援のお願い、とくに2年に一度の名簿改訂と企業広告募集に対するご協力を要請になり、引き続き濱野総務幹事より平成11年度の行事予定・予算案について説明。承認を受けました。

最後に支部恒例の米寿・喜寿を迎えられた方(米寿3名、喜寿9名)のお祝いに移り、当日ご列席の市村宗明様(昭9卒)が米寿代表、老田他四郎様(昭20卒)が喜寿代表として、廣支部長からお祝い品の目録を手渡されました。

2. 本部総会

本部総会については別掲をご覧ください。

3. 懇親会

懇親会はパーティ会場に移動

し、三橋支部長の開会の挨拶と、本部を代表して大嶋副会長よりご挨拶をいただいた後、川本新副支部長の乾杯のご発声でスタート。立食パーティ形式でお料理、お飲物をいただきながら、旧知の方や新しくお知合いになった方とのおしゃべりで盛り上がり、大いに親睦を図ることができました。途中、喜寿代表の老田様、米寿代表の市村様にご挨拶をいただき、老田様からは、悠々自適でなんともうらやましい「欧州洋行三昧」のお話、市村様からは「健康の秘訣は規則正しくストレスない生活が一番」とのなにやら耳の痛いお話を披露いただきました。

最後に廣新支部長の一本締めにて閉会となりました。

あいにくの雨の中、遠く関西や東北方面よりお越しの方も含め、たくさんの方の皆様に会場いただき、誠にありがとうございました。今年度も洛友会および東京支部への暖かいご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

濱野 宏(昭55年卒)記

東京支部旅行会報告

寒かった冬もようやく緩み春の気配を感じ始めた3月13日(土)に、洛友会東京支部の旅行会を開催しました。



今回は水戸偕楽園での観梅をメインに、昼食はあんこう鍋、午後はやきものまじり笠間にて稲荷神社参拝と酒蔵での地酒試飲など、盛りだくさんの内容となりました。特に笠間稲荷神社では手厚い歓待を受け、心に残る旅行会となりました。

1. 観梅とあんこう鍋

まだ朝肌寒いなか、欠席者もなく東京駅に全員集合。満員のバスは定刻どおり出発し、常磐道経由で水戸へ。早起きのおかげで渋滞にも会わず、ほぼ予定通り到着しました。

偕楽園は、最後の將軍徳川慶喜の父、水戸藩主斉昭公が人々の憩いの場として開設した公園で、広

大な敷地には約100種三千本の梅の樹が植え込まれており、後楽園、兼六園と並ぶ日本3大名園の一つです。開花は7分咲きとのことでしたが、ちらほら咲きから果ては散りかけのものまでさまざまで、白梅、紅梅、色とりどりの花が霞の如く青空に浮かび、幻想的な眺めを現出していました。

開花期間中「梅まつり」を開催していて、「梅むすめ」や「水戸黄門」との写真撮影、園内の池では「雛ながし」なども行われ、多くの人で賑わっていました。

花卉が小さく可憐な(?)「てっけん梅」を探して歩いたり、八重寒紅、冬至梅などの花々を愛でることで、都会の喧騒を離れ落ちついた気分、春の息吹を堪能することができました。

歩き疲れておなかの虫が騒ぎはじめのころ、あんこう鍋で有名な水戸市内の「山翠」へ。座敷にあり「あん肝」のなめらかな舌ざわりと「関東のふぐ」とも形容されるあんこうの「七つ道具」の不思議な食感をしみながら、熱燗のいきおいも手伝って、みなさんもお喋りに花を咲かせ、大いに盛り上がりました。

2. 笠間稲荷神社と地酒

あんこう鍋ですっかり暖まった後は、再びバスに乗り「笠間焼き」で有名な笠間市へ。笠間稲荷神社は京都伏見稲荷と並ぶ日本3大稲

荷の一つで、商売繁盛の靈験あらたかなお稲荷様です。今回、廣副支部長のご厚意で、事前に手配をいただいたいて、大勢で押しかけたにもかかわらず盛大な歓待を受けました。

まず拜殿に昇殿させていただき、東京支部を代表して三橋支部長がおそかにご祈禱を授かった後、「直会(なおりあい)の儀」などの儀式をいただきました。みなさんも背筋をのばしてお祈りし、お稲荷様のご利益でこの世紀末不況を吹き飛ばせるよう精進するべく、誓いを新たにいたしました。

「直会(なおりあい)の儀」というのは、「なおりあい」の略で、齋(いみ)を直って平常にかえると言う意味だそうです。神事が終わって後、神酒・神せんをおろしていただく酒宴と言うことです。

さらに別室にてお茶菓子をおたきながら、副宮司さまより神社の来歴や行事、笠間の見どころなど詳しくご説明いただいた後、重要文化財に指定されている本殿の精緻な彫刻の数々、最後は付属美術館にて日本のやきもの技術の歴史までご説明いただき、笠間稲荷神社の全てをご紹介いただきました。みなさんもすっかり時間を忘れて余すことなくお話を伺いました。

最後はお楽しみ酒です。稲荷門前正面に店を構える「笹目宗兵衛商店」は、地酒「二波山松

緑」を御神酒として代々神社に奉納してきた老舗で、平成10年度新酒鑑評会で金賞受賞の折り紙つき。あっさりした口当たりながら独特の風味が広がる「大吟醸」、生きた酵母そのままの「にこり酒」や辛口の新酒「純」など、日本酒好きにはたまらない利き酒となりました。新酒の仕込みのまつ最中だったため、酒蔵内部が見学できないのは残念でしたが、皆さん思い思いにおみやげを所望されていました。

今回訪問した水戸や笠間は、他の観光地とは一味違う落ちついた雰囲気、人情あふれる地元の人々とのふれあいに、心暖まる思い深い旅行会となり、また参加者のみなさんの親睦を大いに深めることができました。

笠間稲荷神社見学の事前手配をいただいた廣副支部長および、副宮司さまはじめ神社のみなさまに厚く御礼申し上げます。
濱野 宏(昭55年卒) 記

編集後記

8月も終りに近づき朝夕には秋の気配を感じるようになりました。

今夏は熱低の接近により、各地で豪雨による災害が多発していますが、これから本格的な台風シーズン到来となります。本号は7月15日の発行予定でし

たが、巻頭の「本多静雄氏」を偲ぶ追悼文掲載のため、約一ヶ月遅らせました。また本号巻頭言として「安井貞三様」にご寄稿いただきましたが、繰り下げましたこと、深くお詫び申し上げます。

計報

大13	本多静雄	11	5	6
昭4	平井平八郎	11	3	6
昭6	足立卓夫	11	4	6
講6	山田勇造	10	10	27
講6	三木盛一	11	5	12
講7	梅原伊都磨	8	8	8
講8	尾形理	11	2	22
昭8	阿部要	11	3	18
講9	岡島清次	8	7	25
昭9	仁田工吉	11	4	29
昭11	清水治郎	11	3	18
昭11	那須恂一	11	5	6
講12	澤村平三郎	10	12	28
昭13	水野正光	10	5	16
昭13	副島敏夫	11	2	24
昭16	松尾武二	11	1	31
昭16	前田藤治	11	2	14
昭16	横井源一	11	3	15
昭16	六田猶敏	11	5	29
昭19	川村徹	8	7	7
昭19	源川誠	10	11	17
昭19	内山政亮	10	12	11
昭19	呉宝鏗	11	3	8
昭21	金田義人	11	10	9
昭21	西田一郎	10	2	22
昭22	鈴木久三	10	3	3
昭24	椿谷義明	10	8	1
昭27	原周作	11	6	5
昭38	越智克躬	6	5	5
昭51	横井貞明	11	5	5

以上の方々をご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。